

**SHOW HEY**シネマルーム

★★★★★

**アマデウス (4K レストア版)**  
(Amadeus)

1984年/アメリカ映画  
配給: オライオン・ピクチャーズ、(株)松竹富士/158分

2025 (令和7) 年11月 8日鑑賞 大阪ステーションシネマ

**Data** 2025-106

監督: ミロス・フォアマン  
脚本・原作: ピーター・シェファー  
出演: F・マーリー・エイブラハム  
/トム・ハルス/エリザベ  
ス・ベリッジ

 **みどころ**

モーツァルトの名曲の数々は、とにかく聴いているだけで心地よい。したがって、夜眠る時にずっと流し続けておくのも1つの秀でた視聴方法だ。その聞き方は本来作曲者に失礼だが、本作導入部に見る、あまりにも人間離れした(?) アマデウスの実像に照らせば、それもOK・・・?

本作中盤では、『フィガロの結婚』や『ドン・ジョバンニ』等のオペラをたっぷり楽しむことができるが、モーツァルトの珠玉のメロディの本質は、交響曲、ピアノ協奏曲、バイオリン協奏曲、そしてピアノソナタ等にある。K(ケツヘル)毎に並べると、その数は・・・?

本作のタイトルは「アマデウス」だが、本当の主演はサリエリ!しかし、宮廷作曲家サリエリの名前を知っている日本人は少ないから、彼がアマデウス(=モーツァルト)に嫉妬し、殺してやろうとまで憎んだ事情を本作でしっかり学びたい。本作を単なる「モーツァルトの伝記モノ」とせず、サリエリにアマデウスへの恨みつらみを語らせ、「レクイエム」の作曲依頼を通じて殺そうとしたストーリー作りのテクニックには、ほとんど感服!

私の邦画のベスト1は『砂の器』(74年)だが、洋画のベスト1は『サウンド・オブ・ミュージック』(65年)、そしてそれに続く洋画のベスト2が本作だ。そんな名作中の名作を40年ぶりに4K レストア版で鑑賞できた感動の158分に感謝!

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

■□■40年前の“名作中の名作”を午前十時の映画祭で!■□■

「1985年度キネマ旬報ベスト10」の第1位が『アマデウス』(84年)。また、『週刊20世紀シネマ館』の1985年(昭和60年)別巻2の「1985年の名画1」として、最初のペー

ジを飾るのも『アマデウス』だ。

1974年に弁護士登録した私は1979年に独立したが、自宅は1989年に大阪府南河内郡美原町に移転するまでは、奈良県生駒郡の法隆寺駅から徒歩10分にある一戸建て住宅に住み、独立前は電車で、独立後は車で通っていた。したがって、私が本作を鑑賞したのは珍しく奈良市内の映画館だったが、当時は忙しくて映画館に行くことなど「夢のまた夢」だったから、本作を鑑賞したのはよほどのコト（動機）だった。もともと、その当時はそもそも「アマデウス」とはモーツァルトのことくらいは知っていても、本作の素晴らしさをちゃんと情報として集めたことはなかったから、約3時間の本作を鑑賞した後の感動と興奮はものすごいものだった。ちなみに、1985年当時の私の年齢は、モーツァルトが不慮の死を遂げた年と同じ35歳だから、今とは違い感受性豊かな時代だ。

そんな35歳の私が初めて本作を見て何よりも驚いたのは、第1に「サリエリ」という皇帝おおかえの宮廷作曲家が、モーツァルトに対する嫉妬心からモーツァルトを毒殺したとの説が本当に存在していたこと、第2にサリエルの目に映る、モーツァルトの実像があまりにも下品で軽薄な男だったことだ。サリエルが自らの罪を神父に告白するストーリーの中で見る若き日のモーツァルトのやんちゃぶり（ハチャメチャぶり）は酷いものだが、中盤で上演される素晴らしいオペラの数々やラストに向けて自らの「レクイエム（鎮魂歌）」を命を削りながら書き続けるストーリー展開は、まさに「これぞ傑作!」。私が挙げる邦画のベスト1は『砂の器』（74年）だが、洋画のベスト1は『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）。それに続く洋画のベスト2が『アマデウス』だから、「午前10時の映画祭」でその『アマデウス』が上映されると知り、早速映画館へ!

## ■□『週刊20世紀シネマ館』での作品紹介は?■□

『週刊20世紀シネマ館』における本作の作品紹介は次のとおりだ。

劇作家の「新脚本」が生み出した  
人間味溢れるモーツァルト像

オーストリア、ウィーンの宮廷音楽家アントニオ・サリエリ（F・マリー・エイブラム）の独白と回想で綴られる「アマデウス」は、モーツァルトの「死」をテーマにした物語である。老醜をさらすサリエリは叫ぶ。「モーツァルト、私を救ってくれ。告白する。私は君を殺した!」

監督は、「カッコー」の果の上で（1975年製作）でアカデミー監督賞を受賞したミロス・フォアマン。原作は、演劇界のアカデミー賞と称されるトニー賞の最優秀作品賞を2度も受賞している劇作家、ピーター・シェーファーの同名の戯曲である。シェーファーが創り出したのは、聖人のような大音楽家ではなく、品が悪くて遊び好きという、人間味溢れるモーツァルト像。そして、「才能を与えてくれた神への復讐心と嫉妬から、サリエリがモーツァルトを「殺害」したという筋書きを作った。フォアマンと議論しつつ、映画用に新たな脚本を書き起こしたシェーファーは語る。

「二人とも、モーツァルトの生涯を表面的にたどる伝記映画を作るつもりはなかった」

二つの才能が融合して生まれた「アマデウス」は、84年度のアカデミー賞で、作品賞をはじめ8部門に輝いた。

## 全編に流れるモーツァルトの楽曲 二人の無名俳優の好演が光る

さらびやかな宮廷文化が咲き誇る18世紀のウィーン。音楽こそ神が授けてくれた天賦の才と信じていたアントニオ・サリエリは、不世出の天才オルフガング・アマデウス・モーツァルトと出会ったばかりに、嫉妬や苦惱に苛まれることになる。

下品で軽薄だが、限らない音楽の才能を秘めたモーツァルトを軽やかに好演したのは、舞台出身のトム・ハルス。一方、シェイクスピア劇で名を馳せた演劇界の名優イブラハムは、抑えた演技で、凡庸な音楽家サリエリの懐悩を表現する。この作品が実質的な映画デビューとなったハルスと、イブラハムとともにアカデミー主演男優賞にノミネートされ、イブラハムがオスカリーを手にした。

また、当時のファッションに欠かせない華やかなかつらの製作は、ウィッグ・デザイナーのポール・ルブラン率いる21人のスタッフが担当。時代考証を重ねて作られた衣装とともに、1500以上のかつらが作品を彩った。

圧巻は、全編に流れる楽曲である。自殺を図ったサリエリが精神病院に運ばれる冒頭で流れる「交響曲第25番短調」、宮廷の仮面舞踏会のシーンでかかる「後宮からの誘かい」、そして「フィガロの結婚」ドン・

ジョバンニ」といったオペラの名作……。

モーツァルトに造詣の深い指揮者ネウエル・マリナーが指揮をとる、アカデミー室内管弦楽団の演奏によって、観る者はドラマに

加え、天才の手になる名曲の数々を堪能することができる。

「素晴らしいドラマ。啓蒙的であると同時に感動的。本年度最高、最大の収穫」

とニューヨーク・タイムズ紙が絶賛した「アマデウス」は、映画史にその名を残したのである。

また、「サリエリによる毒殺説だけではないモーツァルトの“死因の謎”」についての解説と「あらすじ」は次のとおりだ。

### サリエリによる毒殺説だけではない モーツァルトの“死因”の謎

35歳の若さでこの世を去ったモーツァルト。その早世のためか、死の直後から原因について取りざたされてきた。サリエリによる毒殺のほか、モーツァルトが加入していた博愛主義組織フリーメイソンによる暗殺説も有名。これはモーツァルトが死の直前に発表したオペラ「魔笛」のなかで組織の秘儀を暴露したために殺されたという説である。このほか、宮廷劇場総監督による陰謀毒殺、ピアノの弟子だった女性の夫に殺されたなど、さまざまな説がある。葬儀が行なわれたシュテファン寺院の死者名簿の所見によれば、死因は高熱を伴う湿疹が原因の急性粟粒疹熱。近年、高熱が出て、手も足もむくんでいたことから、リウマチ熱説や豚肉の寄生虫に感染したという説も浮上したが定かではない。

### あらすじ

18世紀後半、当時、音楽の都ウィーンでもっとも知られた宮廷音楽家サリエリ（F・マリーリー・エイブラハム）の前に、天才の誉れ高いモーツァルト（トム・ハルス）が現れる。言動は下品で軽薄。しかし彼の作品は素晴らしい。サリエリは嫉妬の炎を燃やすようになる。そしてある日サリエリは、モーツァルトを精神的な破滅に導くために、黒装束に仮面をつけた姿で「鎮魂歌」の創作を依頼する。

STORY

## ■□■音階のお勉強と作曲の入口を本作で！■□■

私は小学4年生の時に少年少女合唱団に入り、NHK全国学校音楽コンクール小学校の部の予選にも出場していた。また、鼓笛隊では指揮棒を振ったこともある。その当時はピアノを習うことができるのはよほどのお坊ちゃま、お嬢サマに限られていたから、私の家（収入）ではピアノを習うことは不可能だった。そして、中学に入ると、「音楽に目を向けることなどもっての他」で、「すべての時間を勉強に」という環境に変わってしまったから、私の音楽的センス（才能？）の成長はそこで完全にストップしてしまっただけ。大学に入り、ギターでのフォークソングの弾き語りが流行するようになると、私も独学でハニホヘトイロハ（CDEFGAB）という音階の勉強を始めたが、所詮その程度のレベルにすぎなかった。

他方、大学1回生の冬から、某大学のピアノ科の女性の縁で交友が始まった高校時代の友人は、成績は良くなかったが自由にピアノ演奏ができる男だったことを知ってビックリ。彼の家で彼がピアノを前に自由に弾きながら歌う姿を見た時は、とにかくビックリ！超うらやましかった。それはあたかも、本作でサリエリがモーツァルトの神がかり的な演奏を聴いた時と同じようなものかも・・・？神はなぜこんな才能を彼に与えたの？そして、俺はなぜ彼と同じことができないの？私の場合はそんな嫉妬心が彼への“殺意”にまで至らなかったが、サリエリの嫉妬心は・・・？

## ■□■『レクイエム』の作曲はまさに死神との闘いに！■□■

加山雄三の『君といつまでも』が大ヒットしたのは1965年。彼を若大将とし、田中邦衛を青大将とした映画『若大将シリーズ』（61～71年）は大ヒットしたが、ハンサムな上、スポーツも歌も万能という加山雄三に、私を含めて当時の若者は誰もが憧れかつ嫉妬したものだ。加山雄三はピアノ、ギター、ウクレレ等の楽器は何でもござれである上、「弾厚作」のペンネームによる作曲も素晴らしかったから、ある意味彼は「現代（昭和）のモーツァルト」だ。その加山雄三の作曲は、思いついたメロディーをそのまま五線譜に書き留めるだけの簡単なものらしいが、本作ラストのモーツァルトによる『レクイエム』の作曲風景を見ていると、それは自らの命を切り刻む壮絶な戦いであることがよくわかる。さらに興味深いのは、既に“死神”に取り憑かれているモーツァルトが、サリエリの協力のもとに「レクイエム」のラストの部分を書き進めていくシークエンスだ。なるほど、モーツァルトの曲はこんな風に作曲されていたのかということがよくわかる。

本作中盤では、皇帝から上演が禁止されていたはずの低俗な『フェガロの結婚』をモーツァルト風の“芸術”にまで高めた上、二重奏から三重奏へ、三重奏から四重奏へ、そして五重奏へ六重奏へと展開していく素晴らしさが語られ、それを目の当たりにすることができる。したがって、それも興味深いのが、何とんでも本作のクライマックスはラストの壮絶な『レクイエム』の作曲風景だ。そんな素晴らしい158分の本作を4Kレストア版で堪能できたことに感謝！

2025（令和7）年11月13日記